



会合はオープンな雰囲気を

ロータリーの友 顧問 鈴木 従道 (長崎南)

私は昨年ガバナーに就任して以来、ボカラトンの国際協議会をはじめいろいろなロータリーの会合に出る機会を得ました。

そこで感じたことは、ロータリーの種々の会合におけるスピーチが端的に言えば美辞麗句をもって飾られ、素直な発言が割合に少ないのではないか、ということです。

もうひとつは大会とか、さまざまな会合といったものが終わると、最後には大成功でありましたと自画自賛で締めくくられることが非常に多いということです。

3つめには、ガバナーが神格化されていて、ガバナーの前では自由な発言がしにくいという雰囲気が残っている、ということではないでしょうか。

一例を挙げれば、この4月にソウルの日韓親善会議に出席しましたが、大体これも上からの発言ばかりが多くて、自由な発言の機会がなかったのではないかと思います。私は大会プログラムが終了後、たまたま呉さんに誘われて反省会に出席させてもらったので、これからの日韓親善会議の運営について、いささか意見を述べることができましたが、そういう機会のなかった方々は全く発言の場がなく、ただ聴かされるばかり。それもロータリーのことならいざしらず、過去の韓日関係における日本帝国主義攻撃の発言を、じっと我慢して聴かねばならぬという日本のロータリアンにとっては実にお気の毒なことで、今度の教科書問題を彷彿とさせ

る光景ではなかったでしょうか。

今年の7月に行なわれたガバナー・バストガバナー懇談会の際に、関係者の方から日韓親善会議は大成功裡に終了したと報告がありましたが、私の考えでは大失敗と大成功の両面があったと思います。

大失敗というのは、マッキヤフリー会長の飛び入りのスピーチが長過ぎて、しかもそれを韓日両国語に翻訳するので3倍の時間を要することになり、このため予定されていた日本側の発言者である辻バストガバナー、末永バストガバナーのスピーチがカットされたことです。おかしなことだと思います。これを大失敗と言わずして何を大失敗と言おうか、大会運営者の失敗だと思います。

強いて成功と言えば、韓国のロータリアンの努力でホーム・ビジットが行なわれ、韓国人の友人ができたことです。私の場合は関さんというソウル三田会の会長をなさっている方のお宅に招待されましたが、関さんは李王朝末期の関皇后の末裔で、韓国の伝統ある家族生活を知ることができ、少なからぬプラスになりました。

それはそれとして、ロータリーの種々の会合や集まりでは、要するにもっと素直に意見を述べられるオープンな雰囲気をこしらえたらどうでしょうか。

(バストガバナー)